

## これまでの滞仏を振り返っての所感

鳴 海 康 平

私は第七劇場という現代演劇のカンパニーを主宰する演出家です。ポーラ美術振興財団より助成を受けて、2012年10月から研修と作品製作のためにパリに滞在しています。滞在は2013年9月末までのため、まもなく予定されている滞在期間の約半分が過ぎようとしています。

私の研修先はパリ市郊外の Vitry sur Seine にある Studio Théâtre de Vitry という劇場で、Direction Régionale des Affaires Culturelles, Île de France, Val de Marne, Vitry sur Seine から助成を受け運営されています。昨年19区にある Théâtre Paris-Villette が経営困難とみなされパリ市から閉鎖通告が出されましたが、私の研修先の劇場は先にあげたように国、地域圏、県、市からの助成を受けており今のところ安定しているようです。これは60年代の André Malraux による Maison de la Culture を引き継ぐ劇場と運営資本は似ていますが、規模としては Studio Théâtre の名の通り、とても小規模です。この劇場は他の一般的な公共劇場のようなシーズンプログラムを設定せず、新作のためのリハーサルの場所として利用されたり、若手やアマチュアカンパニーの上演などに利用されています。ここで私は芸術監督のひとりである演出家・舞台美術家 Daniel Jeanneteau 氏のレクチャーを受けたり、劇場の運営、地域との連携や文化振興を務める中心的存在 animateur としての劇場のあり方などを学んでいます。もちろんすべてが日本に適用できるとは思いませんし、まだその消化に時間がかかりますが、多くの面で刺激を受けています。

また同時に時間の許す限り観劇のために他の劇場に足を運んでいます。これまで観た40弱のパフォーマンスの中では、Maguy Marin の “Nocturnes”、Joël Pommerat の “La Réunification des deux Corées”、Les Chiens de Navarre の “Quand je pense qu'on va vieillir ensemble” が特に（個人的に）刺激的でした。Maguy Marin はコンテンポラリーダンスの振付家です。私が観た “Nocturnes” はいわゆるダンス作品ではなく、とても短い何十編もの心象的なシーンを暗転と轟音をブリッジに淡々とつなげてあるインスタレーションのような作品で、他者が次々にイメージを通して対話を求めてくるようなパフォーマンスでした。Joël Pommerat は2011年に静岡で初来日公

演の予定でしたが震災の影響で叶いませんでした。中堅において頭一つ抜けている作家・演出家といえます。光の魔術師ともいわれるようで、私が観た作品はタイトルがまとっているポリティックなイメージはなく、南北朝鮮が抱える課題を個人同士の関係に敷衍した（これも）短編構成による作品でした。その異名のとおり、高い技術力と繊細な表現力で効果的に照明と映像が駆使され、それが作品の奥行きを深化させる無二の役割を果たしていました。Les Chiens de Navarre はここ数年でとても目立ってきたといわれる若手のカンパニーです。雑誌 Mouvement でのインタビューにもありましたが、俳優のほとんどが演劇学校での訓練を受けておらず、Théâtre public で上演されるフランス国産の集団としては珍しいタイプで、伝統的な洗練は意図的に避けられています。私が観た作品は（これも）短編で構成される作品で、それぞれの短編は強者／弱者もしくは主／従の対比になっています。終結に近くになるにつれ弱者（従）側の倫理観やパラダイムが前面に出て、ある種の転倒とその循環を予見させます。

観る作品の私の選び方にも問題がありますが、現代演劇（特に書き下ろしの新作）の多くが理性や人間性を前提にせず物語自体が相対化、分節化され、語り raconter に対する考えも Stanislas Nordey のように原理的であったり、Pascal Rambert のように形式にリベラルであったりするなど多様化している印象を受けます。ある意味で「演劇の終焉」ともいえる時なのかもしれません。私自身ひとりの日本人／アジア人として、フランス／ヨーロッパのコミュニタリズムの壁を感じるが多々ありますが、残りの滞仏の中で、自身の研修の充実とともに、フランス現代演劇の「終焉」の向こう側と水面下を探っていきたいと考えています。